Ⅱ　稲　　作

主力品種「はえぬき」の刈取り適期は、出穂後積算気温で９５０～１，２００℃で刈遅れによる品質低下に注意する。晩生品種や直播栽培の刈取りについても、積算気温を参考に、青籾歩合や籾水分等を確認し、適期刈取りに努める。刈取り後は、適正な乾燥・調製で高い品質の確保を図る。また、収穫作業終了後は作業機械の整備・点検、圃場環境の整備を進めるとともに、次年度に向けて本年稲作の反省検討を行う。

１　適期内刈取りと適正乾燥調製

コシヒカリや直播栽培においても９月末までには成熟期に達する。刈り遅れると、着色粒、白粒、胴割れ粒及び光沢不足などが多くなり、等級低下の要因となるので、青籾歩合や籾水分等を確認し、適期刈取りに努める。

刈取り後の乾燥では、乾燥機停止後の余熱による乾燥の進み（余熱乾燥）や青籾が多い場合の水分の戻りに注意し、適正水分（１５％）に仕上げる。

調製作業での失敗を防ぐため、必ず「試しずり」を行い、肌ずれや砕粒、胴割れの発生、アラ混入等がないことを確認してから連続作業に入る。

２　農作業安全の推進

秋作業では、収穫機、乾燥機、籾摺り機など農業機械を使用することが多いので、農作業事故防止を徹底する。特に、降雨で土壌が緩み、足場が悪くなっている圃場では、無理な作業は避けて事故防止に最優先で取り組む。

３　稲わらの腐熟促進

稲わらの腐熟促進を図るため石灰窒素等を施用する場合は、収穫後なるべく早い時期に散布する。なお、腐熟促進剤は、関与する微生物の活性が高まるように、連年施用に努める。また、ようりん、ケイカル等を併用すると土づくりの効果が一層高まることから、土壌分析結果に基づいて施用する。

４　ほ場の均平、排水

コンバイン等の秋作業で田面の凹凸が大きくなった場合は、秋のうちに均平作業を行っておく。また、排水の悪いところでは明きょを掘り、停滞水を排除する。特に、秋から翌春にかけて水閘の開放等により圃場の乾燥を心掛ける。

５　農業機械の格納

格納にあたっては、格納時点検基準並びにそれぞれの農業機械の取扱説明書に従い点検整備を行う。

６　品種構成の点検

作柄や品質の実態を踏まえ本年の米づくりを評価・点検し、次年度に向けた品種構成等を検討する。